



令和6年6月17日

研修だより 16号

動作化による理解の促進

小笠原康晃

先日、1年1組の授業を見ました。

算数「なんばんめ」の学習でした。

順序を伴った数の数え方は、通常の数え方と異なります。

「前から3人の人は立ちましょう。」というとき、前から3人の人が立ちます。

「前から3人目の人は立ちましょう。」というとき、前から3人目の人だけ立つこととなります。

「目」が入ると、少しだけ意味合いが変わります。

このことを理解するのは、1年生にはとても難しいところです。

磯野先生は、導入場面で12人の子どもたちを1列に並ばせました。

そして、

「前から2人の人は立ちましょう。」

「前から3人目の人は立ちましょう。」

と、実際に動く指示を出して学習を進めていました。

子どもたちは、実際に体を動かしながら「なんばんめ」について、学習をしていました。

動作を伴った学習は、子どもたちの頭の中に残りやすいです。

五感を使った学習ほど、定着をすると感じています。

特殊音声に関する指導において、手を叩いて行うことがあります。

(ちなみに、手を叩いて特殊音声を学習することは「MIM」ではありません。「MIM」とは、「一斉指導の中で苦手な子を発見し、苦手な子もできるようにするために開発された指導法のこと」です。)

当たり前のように発する言葉であるため、学習には再認識が必要です。

その再認識に繋がるのが、手を叩くという「動作」です。

動作を入れることで、子どもたちの理解を深めることができます。

苦手な子も楽しみながら、取り組むことができます。

これが「動作化」のよさです。

授業の様々な場面で、動作化できる場所はあります。

ぜひ、挑戦してみてください。